

カザフスタン共和国国立博物館での考古学研修

奈文研は文化庁の委託により、2019年4月から、カザフスタン共和国国立博物館を相手国拠点とし、考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業を開始しました。11月19日から22日まで国立博物館に研究者3名を派遣し、①レプリカ法による土器の圧痕分析と、②土器に残存する脂質の分析の研修をおこないました。

①は土器の表面に残る植物等の圧痕にシリコンを注入してレプリカを採取し、それを走査型電子顕微鏡で観察して、植物等の種類を同定する方法です。明治大学の佐々木由香さんがこの方法について説明し、その後、カザフスタンの初期鉄器時代の土器を用いて実習をおこないました。受講者は専用キットを使って圧痕のレプリカを採取しました。②は土器の胎土に残された脂質を抽出・分析することで、土器で調理された食物をあきらかにする方法です。奈文研国際遺跡研究室室長の庄田が、はじめにこの方法の概要を説明し、東アジア各地の先史時代の土器の分析から得られた成果を報告しました。次に、カザフスタンの青銅器時代・初期鉄器時代の土器片を用いて、試料を採取する実習をおこないました。

4日間の研修には、国立博物館の研究員の他、国立ユーラシア大学、ナザルバエフ大学の教授・学生など27名が参加しました。参加者からは、本研修を通して新しい土器の調査方法について知ることができた、他の研修と違って実習も含まれているのがよかったです等の感想が寄せられました。今後も考古学研修を通して、カザフスタンの文化遺産の調査・保存を担う専門家との技術交流・研究協力を続けていきます。

(企画調整部 影山 悅子)



レプリカ法による土器の圧痕分析の実習

奈文研との学術交流に参加して

私たちは中国社会科学院考古研究所と奈文研との共同研究にもとづき、2019年11月1日から12月1日まで、奈文研の方々と交流することができました。

期間の前半は、奈文研が東大寺、奈良県立橿原考古学研究所と共同で実施していた東大寺東塔院の発掘調査に参加しました。実際に、遺構を発掘し、土層図の作成などをおこないました。そこでは、日本と中国の発掘方法の違いを感じるとともに、自分たちの発掘方法について見つめ直す機会を得ました。日本古代の代表的な寺院である東大寺の調査に参加できたことは得難い機会でした。

後半は、奈文研のいくつかの部署を見学しました。特に、木器にのこる年輪を手掛かりに複数の遺物を接合するという研究は、中国でも珍しく非常に興味をもって、担当の研究員の方と議論をしました。木器の保存方法や研究方法については中国でも非常に関心が高まっています。今後も、こうした方面で日本との交流を深めたいと感じた次第です。

11月26日には、奈文研にて講演をおこないました。周は「旧石器時代の火を用いた技術　寧夏省水洞溝遺跡を例として」、唐は「江蘇省蘇州木瀆古城遺跡の発掘調査と研究(東周～漢代)」と題して、それぞれ現在の研究や発掘調査の紹介をし、奈文研の多くの研究員からさまざまな質問、意見をいただくことができました。

1カ月という短い間でしたが、多くの研究者と知り合うことができたことは、今後の我々自身の財産ともなり、同時に両研究所間の友好関係を促進するうえでも大きな力となるでしょう。このような有意義な交流が継続することを希望します。

(中国社会科学院考古研究所 周 振宇・唐 錦琼)



土層図の作成